

母親と保育者の乳幼児に対する身体接触についての研究： 身体接触の種類と情動場面に着目して

A Study of Mothers' and ECEC Teachers' Physical Contact with Younger Children:
Focusing on the Type of Physical Contact and Emotional Status.

山口 春花 白川 佳子
Haruka YAMAGUCHI Yoshiko SHIRAKAWA

本研究の目的は、母親と保育者が子どもに対して行う身体接触到どのような特徴があるのか、また、子どもの情動場面によって母親と保育者の身体接触は異なるのかを明らかにすることである。0歳児から5歳児クラスの母親と同一園に勤務する保育者を対象とし、母親には自分の子ども（保育者は自分のクラスの子ども）に対して行う身体接触を尋ねた。その結果、1歳児群の母親は他の年齢群の母親より身体接触をする人が有意に多く、それに対して、1歳児群の保育者は他の年齢群の保育者より身体接触をする人が有意に少ないことが明らかになった。さらに、母親と保育者では1歳児に対して行う身体接触が子どもの情動場面によって異なることが示唆された。

キーワード：身体接触の種類、母親、保育者、情動場面、乳幼児

The purpose of this study was to clarify the characteristics of physical contact between mothers and ECEC teachers with younger children, and whether the physical contact between mothers and ECEC teachers differs depending on the children's emotional situations. Mothers of 0 to 5 year old classes and ECEC teachers working in the same preschool were included, and mothers were asked about physical contact they make with their own children (and ECEC teachers are children in their own classes). The results showed that mothers in the 1-year-old group made significantly more physical contact with their children than mothers in the other age groups, while ECEC teachers in the 1-year-old group made significantly less physical contact with their children than ECEC teachers in the other age groups. Furthermore, the results suggest that the physical contact mothers and ECEC teachers make with 1-year-olds differs depending on the child's emotional situation.

Key words: Types of Physical Contact, Mother, ECEC Teacher,
Emotional Situations, Younger Children

I. 問題と目的

身体接触については、今まで看護や医療分野、心理学等、様々な分野で研究が行われてきた。なかでも、発達心理学の分野では、愛着に関する研究の中で身体接触の重要性が主張されている。

Bowlby¹⁾は、子どもが他者(特に母親)を求めて接近する行動を「愛着行動」とし、愛着行動を媒介する行動について「定位行動」、「信号行動」、「接近行動」の3つをあげている。1つ目の「定位行動」は、母親の動きを目で追いかけたり、耳で確かめたりすることによって、母親の所在を知ることができる行動である。2つ目の「信号行動」は、子どもが母親に対して、泣き叫ぶ、微笑む、喃語をいう、呼び求めるといった行動をすることで、母親を子どもの方へ引き寄せる効果がある行動である。3つ目の「接近行動」は、子どもが母親を後追いつたり、しがみつき行動をしたりすることによって、子どもを母親の方へ近付ける効果がある行動である。特に、3つ目の「接近行動」は、養育者などの特定の人にしっかりとくっつくことで、安心や安全の感覚を回復する傾向が示されており、愛着を形成するうえで身体接触をすることが重要な要素になると指摘している。

また、身体接触は、幼少期の親子関係を形成するうえで重要な役割を担っており²⁾、健全な情緒の発達や社会化に影響を与える可能性が示唆されている^{3) 4)}。例えば、松本⁵⁾は、乳児期における心の健康について、母親の行動である授乳、抱擁、声かけなどといった母子間の頻繁で持続的な身体接触(肌の触れ合い)によって、母親が子どもにとっての安全基地となり、子どもの不安を和らげる効果があると指摘している。さらに、山口⁶⁾は乳児期に行われる母子の身体接触が児童期だけではなく、思春期の子どもの攻撃性にも影響を及ぼすことを明らかにしている。この点について山口^{7) 8)}は、親からの身体接触が幼少期に少なかった場合、情緒

的な不安定感や心理的な不適応が高まるだけではなく、心身の健康度も低くなるという結果を報告している。また、藤田⁹⁾は大学生を対象とした研究を行い、幼少期の両親からの身体接触が基礎となり、人に対する信頼感や安心感が芽生え、他者との積極的な関わりや社会性の形成に繋がることを明らかにした。加えて、山口¹⁰⁾は、肌と肌とのスキンシップには人間本来の集団欲も満たし、成長ホルモンを分泌させる効果があり、社会の中で自信をもって生きていける「人志向」の人間に育てるためにも、豊富なスキンシップをとるべきだと指摘している。

以上のことから、母子間の頻繁で持続的な身体接触は子どもの不安を和らげる重要な役割を担っており、母子間の関係性を深めるだけではなく、人間関係の発達にも大きな影響を与えているといえるだろう。そのため、本研究では母親の身体接触に焦点を当てることにする。

しかしながら、養育者からの身体接触は、子どもの年齢と共に減少することが明らかになっている^{11) 12)}。鈴木・春木¹³⁾は、大学生を対象として、生まれてから現在までに両親から受けた身体接触が、年齢と共に減少していることを明らかにした。また、曹・釘原¹⁴⁾が行った発達段階による親子間の身体接触の研究でも、両親が幼稚園期から中学生期の子どもに対して行う身体接触は学年と共に減少し、とりわけ小学生高学年期から中学生期間の減少幅が大きいと示唆している。これらの研究は、大学生や児童を対象に回顧法で調査されたものが多く、実際の乳幼児期の子どもに対する身体接触がどのように行われているのか研究されたものは少ない。

幼少期の身体接触に関しては、鎌田¹⁵⁾が、子育て支援センターや幼稚園を利用している0歳から5歳の子どもを育てる保護者に対して調査を行った。その結果、乳幼児期も年齢と共に身体接触が減少するが、心の拠り所として身体接触を適度に求めることが明らかになった。ま

た、藤田¹⁶⁾は幼稚園に通う5歳児を対象に、遊びの中で行われる身体接触について研究を行った。すると、年長児は、保育者との身体接触が減少する一方で、友達との身体接触は増加することが明らかになった。しかしながら、母親や保育者が子どもに対して行う身体接触の中でどのような身体接触が減少するのか、また、子どもの年齢によってどのような身体接触を使用しているのか、具体的に研究されたものは少なく、さらなる研究が必要だと考える。

一方、母親と保育者に対する子どもの姿については、家庭と園という異なる環境間の移行における子どもの適応の方法を解明し、子どもを取り巻く環境の望ましい姿や子どもと大人のあるべき共生の形を模索した具体的な研究も行われている。例えば、根ヶ山・河原ら¹⁷⁾は、1、2歳児の子どもが家庭と園という異なる環境において、どのように行動を切り替え、適応しているのか「泣き」を手がかりに研究を行った。その結果、同一児が保育園よりも家庭においてよく泣いていることやそれぞれの場面で母親と保育者に見せる姿が異なることを明らかにした。また、河原・根ヶ山¹⁸⁾の食事場面における家庭と園の比較研究でも、子どもの食事場面における家庭と園での拒否行動の違いが明らかにされており、子どもと養育者の相互作用を理解する上で「それぞれの場面で子どもが発信するメッセージ」に耳を傾けることが必要であると述べている。この点については、北野¹⁹⁾も保育者の専門性として、園と家庭が分断されることなく「実際の子どもの育ちの姿」の情報を共有し、連携することによって、園そして家庭での子どもの育ちの連続性を図ることが大切だと指摘している。

以上のことから、母親と保育者が子どもに対して行う身体接触の使用の有無について調査し、母親の身体接触の特徴と保育者の身体接触の特徴を明らかにする必要があると考える。これは、保育者が「子ども理解」を深め、「実際の子どもの育ちの姿」を母親と共有し、家庭と

園の子どもの育ちの連続性を図るためにも不可欠な視点である。

そこで本研究では、母親と保育者が子どもに対して行う身体接触の使用の有無にどのような特徴があるのか、さらに、子どもの情動場面によって母親と保育者の使用する身体接触が異なるのかを明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 研究協力者

本研究の研究協力者は、東京都内の保育園とこども園（計18園）に通園する0歳児クラスから5歳児クラスの子どもの母親（520名）と同一園に勤務する保育者（320名）とした。アンケート回収率は、母親181名（34.8%）、保育者161名（50.3%）であった。本研究では、身体接触に関する調査に回答した母親174名（33.5%）、保育者130名（40.6%）を有効回答とし、分析に用いた。

母親の年齢は、20代12名（6.9%）、30代108名（62.1%）、40代53名（30.5%）、50代以上1名（0.6%）。保育者の年齢は、20代82名（63.1%）、30代25名（19.2%）、40代14名（10.8%）、50代以上9名（6.9%）。調査協力者の子どもの年齢は、0歳11ヵ月～6歳11ヵ月（平均年齢；3歳4ヵ月）であった。

母親の養育経験年数は、1～5年が140名（80.5%）、6～10年が29名（16.7%）、11年以上が5名（2.9%）であった。保育者の養育経験年数は、1～5年が68名（52.3%）、6～10年が41名（31.5%）、11年以上が21名（16.2%）だった。

2. 調査期間

アンケート調査は、2019年2月～2019年3月の期間に実施した。

3. 分析の方法

分析には、「統計ソフトR」と「統計WEB自動計算フォーム（<https://bellcurve.jp/statist>

ics/blog/13953.html)」を用いた。

4. 身体接触に関する調査内容について

(1) 身体接触の種類と子どもの情動場面の種類について

身体接触の種類は、「①背中をトントンする」、「②なでる」、「③抱きしめる」、「④おんぶする」、「⑤膝に乗せる」、「⑥肌と肌をくっつける」、「⑦手を握る」、「⑧抱っこする」の8種類とした。これは、鎌田²⁰⁾の研究で使用された身体接触の種類を参考にした。

身体接触の情動場面については、藤田²¹⁾や鎌田²²⁾が、乳幼児期の身体接触は、生活場面よりも情動場面において多く行われていることを明らかにしている。このことから、本研究では「嬉しい時」、「楽しい時」、「悲しい時」、「不安な時」、「困った時」、「イライラした時」の6種類の情動場面を用いることにした。

(2) 子どもの年齢区分による母親と保育者のグループ分け

身体接触は、特に、3歳未満でよく見られるため^{23) 24)}、子どもの年齢区分については、子どもの在籍しているクラスを元に「0歳児クラスの母親(保育者)」(以下、0歳児群)、「1歳児クラスの母親(保育者)」(以下、1歳児群)、「2歳児クラスの母親(保育者)」(以下、2歳児群)、「幼児クラスの母親(保育者)」(以下、幼児群)とした。

5. 倫理的配慮

本研究では、調査協力者への研究協力の同意や注意事項等をアンケートのフェイスシートに記載し、研究内容や調査方法について承諾いただける方のみ「同意」という項目にチェック後、調査項目に回答してもらうという形式をとった。また、「研究に同意しない場合」や「回答開始後に回答を取り止め、その場でアンケートを終了し、提出をしない場合」でも不利益にならないことを記載している。アンケート(母

親用アンケート・保育者用アンケート)は無記名で行い、アンケートの回収は園に設置した回収ボックスを使用することで個人情報の守秘を徹底した。なお、本研究は著者の所属する機関での倫理審査委員会にて承認を得ている。

Ⅲ. 結果と考察

1. 母親が乳幼児期の子どもに対して行う身体接触の特徴

乳幼児期の子どもを育てる母親174名に8種類の身体接触のうち、子どもに対して行う身体接触として、あてはまるものを全て選択してもらった。身体接触の種類ごとに「0歳児群(39名)」、「1歳児群(31名)」、「2歳児群(42名)」、

表1 母親が乳幼児期の子どもに対して行う身体接触の使用の有無

身体接触の種類	母親の分類	する	しない	合計	比率	多重比較 (Ryan 法) <身体接触の有無の比率>
①背中をトントンする	0歳児群	29	10	39	0.744	n.s.
	1歳児群	25	6	31	0.806	
	2歳児群	31	11	42	0.738	
	幼児群	39	23	62	0.629	
②なでる	0歳児群	32	7	39	0.821	1歳児群>幼児群***
	1歳児群	31	0	31	1.000	
	2歳児群	36	6	42	0.857	
	幼児群	47	15	62	0.758	
③抱きしめる	0歳児群	38	1	39	0.974	n.s.
	1歳児群	30	1	31	0.968	
	2歳児群	41	1	42	0.976	
	幼児群	55	7	62	0.887	
④おんぶする	0歳児群	11	28	39	0.282	1歳児群>0歳児群**
	1歳児群	19	12	31	0.613	
	2歳児群	17	25	42	0.405	
	幼児群	19	43	62	0.306	
⑤膝に乗せる	0歳児群	33	6	39	0.846	n.s.
	1歳児群	26	5	31	0.839	
	2歳児群	32	10	42	0.762	
	幼児群	40	22	62	0.645	
⑥肌と肌をくっつける	0歳児群	32	7	39	0.821	1歳児群>幼児群**
	1歳児群	29	2	31	0.935	
	2歳児群	35	7	42	0.833	
	幼児群	42	20	62	0.677	
⑦手を握る	0歳児群	21	18	39	0.538	1歳児群>0歳児群**
	1歳児群	26	5	31	0.839	
	2歳児群	35	7	42	0.833	
	幼児群	41	21	62	0.661	
⑧抱っこする	0歳児群	35	4	39	0.897	n.s.
	1歳児群	31	0	31	1.000	
	2歳児群	37	5	42	0.881	
	幼児群	50	12	62	0.806	

*** $p < .001$ ** $p < .01$

「幼児群（62名）」の母親4群で差異があるのかを検討するため、カイ二乗検定を実施した。

分析の結果、有意差があった場合のみ、ライアン法を使用した比率の差の多重比較を行った。表1に示したように、下位検定の結果、4種類の身体接触において年齢群間に有意差がみられた。

「②なでる」では、1歳児群が幼児群より有意に多く選択していた。「④おんぶする」では、1歳児群が0歳児群より有意に多く選択しており、さらに1歳児群は幼児群より有意に多く選択していた。「⑥肌と肌をくっつける」では、1歳児群が幼児群より有意に多く選択していた。「⑦手を握る」では、1歳児群が0歳児群より有意に多く選択しており、さらに1歳児群は2歳児群より有意に多く選択していた。

以上のことから、1歳児群の母親は、他の年齢群の母親よりも4種類の身体接触において使用している人が有意に多いことが明らかになった。

「③抱きしめる」、「⑧抱っこする」では、子どもの年齢に関わらず、8割以上の母親が子どもに対してこれらの身体接触を行っていることが明らかになった。このことに関して、山口・白川²⁵⁾は、不安定な姿を見せる3歳未満の子どもへの関わりについて、仮想場面を用いた調査を行い、母親が3歳未満の子どもに対して「抱きしめる・抱っこする」という身体接触を多く行くと報告している。特に、「抱っこ」という身体接触について、山口²⁶⁾は、母親がよく「抱っこ」するほど、0歳から5歳の子どもの情緒が安定し、人間関係の基礎となる社会性を育てると指摘している。また、飯塚²⁷⁾は、抱っこには「ぬくもり」、「やわらかさ」、「重み」、「手触り」といった情緒的な因子が、母子関係の形成に大きく寄与することも示唆している。これらの先行研究から、「抱っこ・抱きしめる」という身体接触は、誕生から幼児期までに行われるものであり、母親と子どもが関係性を築くうえでも重要なものだといえる。

2. 保育者が乳幼児期の子どもに対して行う身体接触の特徴

乳幼児期の子どもと関わる保育者130名に8種類の身体接触のうち、自分のクラスの子どもに対して行う身体接触として、あてはまるものを全て選択してもらった。身体接触の種類ごとに「0歳児群（31名）」、「1歳児群（31名）」、「2歳児群（23名）」、「幼児群（45名）」の保育者4群で差異があるのかを検討するため、カイ二乗検定を実施した。

分析の結果、有意差があった場合のみ、ライアン法を使用した比率の差の多重比較を行った。表2に示したように、下位検定の結果、3種類の身体接触において、年齢群間に有意差が

表2 保育者が乳幼児期の子どもに対して行う身体接触の使用の有無

身体接触の種類	保育者の分類	する	しない	合計	比率	多重比較 (Ryan法) <身体接触の有無の比率>
①背中をトントンする	0歳児群	23	8	31	0.742	n.s.
	1歳児群	25	6	31	0.806	
	2歳児群	20	3	23	0.870	
	幼児群	37	8	45	0.822	
②なでる	0歳児群	31	0	31	1.000	0歳児群>1歳児群**
	1歳児群	25	6	31	0.806	
	2歳児群	22	1	23	0.957	
③抱きしめる	0歳児群	31	0	31	1.000	n.s.
	1歳児群	29	2	31	0.935	
	2歳児群	22	1	23	0.957	
④おんぶする	0歳児群	16	15	31	0.516	n.s.
	1歳児群	11	20	31	0.355	
	2歳児群	11	12	23	0.478	
⑤膝に乗せる	0歳児群	30	1	31	0.968	n.s.
	1歳児群	27	4	31	0.871	
	2歳児群	22	1	23	0.957	
⑥肌と肌をくっつける	0歳児群	21	10	31	0.677	2歳児群>1歳児群**
	1歳児群	14	17	31	0.452	
	2歳児群	19	4	23	0.826	
⑦手を握る	0歳児群	23	22	45	0.511	2歳児群>幼児群**
	0歳児群	30	1	31	0.968	
	1歳児群	18	13	31	0.581	
⑧抱っこする	2歳児群	21	2	23	0.913	0歳児群>1歳児群***
	幼児群	41	4	45	0.911	
	0歳児群	31	0	31	1.000	
⑧抱っこする	1歳児群	30	1	31	0.968	2歳児群>1歳児群***
	2歳児群	23	0	23	1.000	
	幼児群	39	6	45	0.867	

*** $p < .001$ ** $p < .01$

みられた。

「②なでる」では、0歳児群が1歳児群より有意に多く選択していた。「⑥肌と肌をくっつける」では、2歳児群が1歳児群より有意に多く選択しており、さらに2歳児群は幼児群より有意に多く選択していた。「⑦手を握る」では、0歳児群が1歳児群より有意に多く選択しており、2歳児群も1歳児群より有意に多く選択していた。さらに、幼児群も1歳児群より有意に多く選択していた。

以上のことから、1歳児群の保育者が、他の年齢群の保育者よりも3種類の身体接触において使用している人が有意に少ないことが明らかになった。

この結果は、前述した1歳児群の母親が他の年齢群の母親よりも4種類の身体接触において使用している人が有意に多かった結果とは逆の傾向を示しており、1歳児群の母親と1歳児群の保育者が子どもに対して行う身体接触に焦点を当てた分析が必要だと考える。このことについては、「3. 親と保育者が1歳児に対して行う身体接触の種類と情動場面について」にて詳述する。

一方、「②なでる」、「③抱きしめる」、「⑤膝に乗せる」、「⑧抱っこする」では、子どもの年齢に関わらず、8割以上の保育者が子どもに対してこれらの身体接触を行っていることが明らかになった。水野・今村²⁸⁾は、3歳児と保育者の身体接触について調査し、保育者が様々な場面で子どもを安心させる身体接触を行い、なおかつ、子どもとの信頼関係を築く一手段として身体接触を用いていることを示唆した。この点について、西²⁹⁾が、保育とは、保育者と子どもたちの信頼関係によって成り立っており、子どもと関係を深め、理解していくことは保育者にとって重要な意義をもっていると述べている。また、数井³⁰⁾は、子どもが幼稚園や保育所といった家庭とは異なる集団保育の場で、親とは異なるアタッチメントを保育者と築くことを示唆している。特に、保育者は子どもが不安

や恐れを感じた時に、「安全基地」の役割として、子どもの安心・安全を回復させ、その積み重ねの中で社会性の発達を支えていく存在でもあるといわれている³¹⁾。これらのことから、子どもの年齢に関係なく、子どもを「抱きしめる」、「抱っこする」、「膝に乗せる」という密着する接触や「なでる」という慰める接触を選択した保育者が多かったのではないかと考えられる。

3. 母親と保育者が1歳児に対して行う身体接触の種類と情動場面について

前述したように、母親と保育者が子どもに対して行う身体接触の群間比較では、1歳児群の母親が他の年齢群の母親よりも、4種類の身体接触において使用している人が有意に多いのに対し、1歳児群の保育者は他の年齢群の保育者よりも、3種類の身体接触において使用している人が有意に少ないという特異な特徴が示された。

この後の分析では、1歳児群の母親と1歳児群の保育者が子どもに対して行う身体接触の使用の有無と身体接触を行う情動場面について、母比率の差の検定を行った。ここでは、1歳児群の母親31名と1歳児群の保育者31名のデータを用いた。1歳児群の子どもは、1歳11ヵ月から2歳10ヵ月(平均年齢2歳5ヵ月)であった。なお、調査を行った時期が2月であったため、31名中29名は2歳を迎えていた。

(1) 身体接触の種類

表3に示したように、8種類の身体接触のうち、「②なでる」($z=2.58, p<.05$)、「④おんぶする」($z=2.03, p<.05$)、「⑥肌と肌をくっつける」($z=4.13, p<.01$)、「⑦手を握る」($z=2.24, p<.05$)の4種類の身体接触において、1歳児群の母親が1歳児群の保育者よりも有意に多く選択していることが明らかになった。

1歳児は、自由な移動ができるようになると共に、家庭で養育者が傍を離れようとする後

表3 母親と保育者が1歳児の子どもに対して行う身体接触の使用の有無

身体接触の方法	母親		保育者		z 値	p 値
	N = 31	%	N = 31	%		
①背中をトントンする	25	80.6	25	80.6	0.0000	n.s.
②なでる	31	100.0	25	80.6	2.5774	.010*
③抱きしめる	30	96.8	29	93.5	0.5918	n.s.
④おんぶする	19	61.3	11	35.5	2.0331	.042*
⑤膝に乗せる	26	83.9	27	87.1	0.3605	n.s.
⑥肌と肌をくっつける	29	93.5	14	45.2	4.1321	.001**
⑦手を握る	26	83.9	18	58.1	2.2383	.025*
⑧抱っこする	31	100.0	30	96.8	1.0082	n.s.

** $p < .01$ * $p < .05$

を追ったり、抱っこを求めたり、抱っこから降ろされそうになると必死にしがみついたり、養育者の姿が見えないと探すことが増えるといわれている³²⁾。その一方で、今まで一心同体だと感じていた母親が、自分とは異なる存在であることを認識し始めると、「自我のめばえ」といわれる「自分なりの心の世界が誕生」を迎えると考えられている³³⁾。この点について、根ヶ山³⁴⁾も、乳児期における母子関係の求心性と遠心性が身体接触を考えるうえで重要な性質であると述べている。

以上のことから、1歳児は運動面や心情面の成長が著しい一方で、自分でできるという時もあるれば、大人に手伝って欲しいと甘えたい時もあり、心の揺れ動きが大きい時期だともいえる。だからこそ、母親は子どもが不安や葛藤を感じている時に安心を得ることができる身体接触を子どもの状態に合わせて行う可能性があり、それに伴って身体接触を使用する母親が保育者よりも有意に多くなるのではないかと推察される。

一方、保育園という集団保育の場における1歳児に対する関わりについて、若山³⁵⁾は、保育者は子どもが自分でしようとする気持ちを尊重し、見守っていくことが大切だと述べている。そのため、保育現場の中では、子どもの思いを受け止め、見守ることを重視することも多く、身体接触が少なくなることが考えられる。さらに、古賀³⁶⁾は、1歳児保育において子ども

を主体として尊重し、他の欲求とぶつかり合う中でその内面を調整するというような丁寧な保育プロセスの質を保障することの重要性を指摘している。

以上のことから、1歳児の保育において子どもの主体性や他の子どもとの関わりが重視されることも多く、それに伴って身体接触を使用する保育者が母親よりも有意に少なくなるのではないかと推察される。野澤³⁷⁾は、乳児期から家庭と園を行き来し、親と保育者との密接な関わりを経験する中で、それぞれの関係においてアタッチメントが形成される可能性を示唆している。また、野澤³⁸⁾が述べているように、子どもは家庭と園を行き来しているため、園の中で保育者との身体接触が少なかった場合には、家庭の中でより多くの身体接触を求める可能性が考えられる。この点については、さらなる検討が必要であろう。

(2) 身体接触を行う情動場面

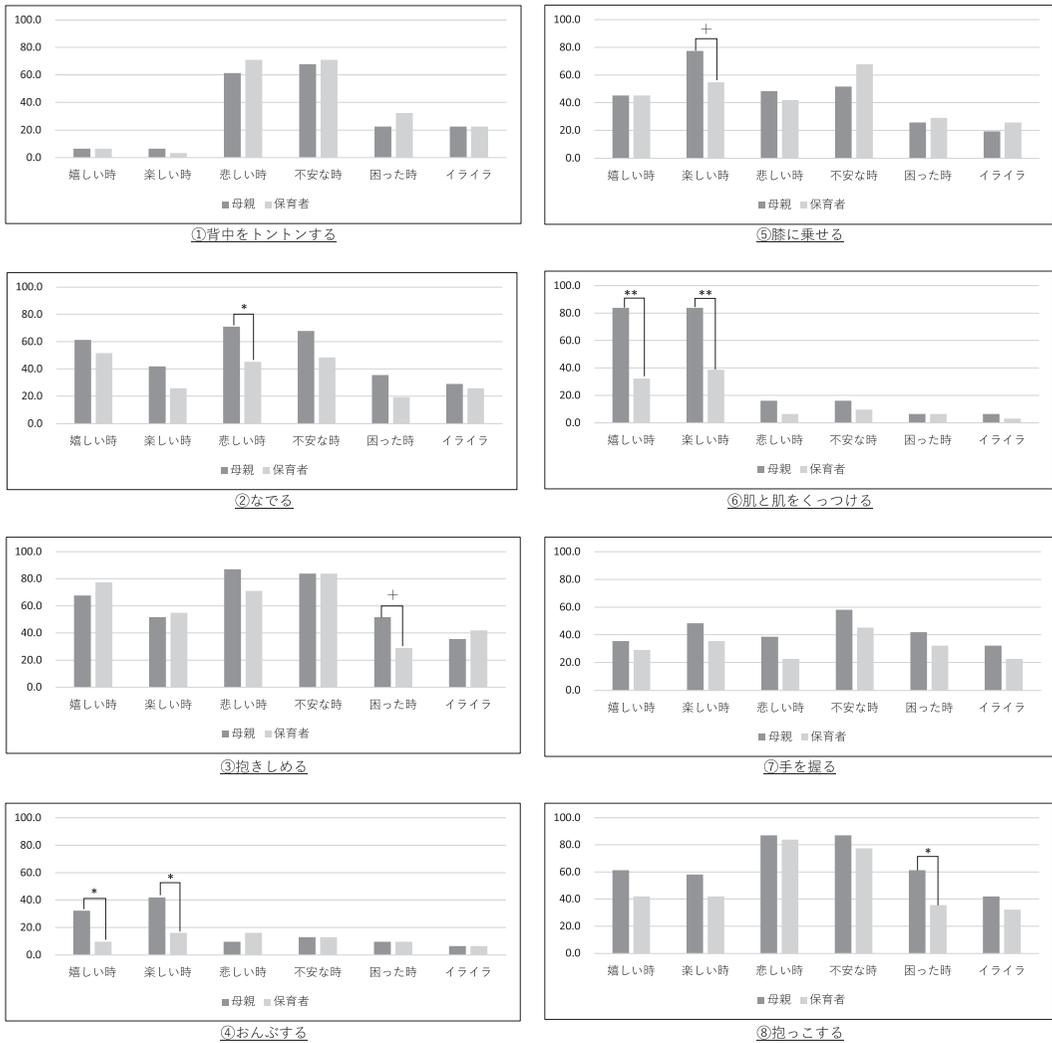
次に、子どもに対して行う8種類の身体接触に関して、どのような情動場面で行うのか6種類の情動場面の中であてはまるものを全て選択してもらった。図1に示したように、「②なでる」、「③抱きしめる」、「④おんぶする」、「⑤膝に乗せる」、「⑥肌と肌をくっつける」、「⑧抱っこする」の6種類の身体接触の情動場面で有意差がみられた。「②なでる」では、1歳児群の母親が1歳児群の保育者よりも「悲しい時」に有意に多く身体接触を行っていた($z=2.06, p<.05$)。「③抱きしめる」では、1歳児群の母親が1歳児群の保育者よりも「困った時」に身体接触を行う傾向がみられた($z=1.81, p<.10$)。「④おんぶする」では、1歳児群の母親が1歳児群の保育者よりも「嬉しい時」($z=2.18, p<.05$)や「楽しい時」($z=2.24, p<.05$)に有意に多く身体接触を行っていた。「⑤膝に乗せる」では、1歳児群の母親が1歳児群の保育者よりも「楽しい時」に身体接触を行う傾向がみられた($z=1.88, p<.10$)。「⑥肌と肌をくっつける」

では、1歳児群の母親が1歳児群の保育者よりも「嬉しい時」($z=4.11, p<.01$)や「楽しい時」($z=3.65, p<.01$)に有意に多く身体接触を行っていた。「⑧抱っこする」では、1歳児群の母親が1歳児群の保育者よりも「困った時」に有意に多く身体接触を行っていた($z=2.03, p<.10$)。

1歳児群の母親は、「嬉しい時」や「楽しい

時」というポジティブな情動場面で「④おんぶする」、「⑤膝に乗せる」、「⑥肌と肌をくっつける」といった身体接触を行う特徴があり、1歳児群の保育者は有意差が無いものの、「悲しい時」や「不安な時」といったネガティブな情動場面で身体接触を行うことが明らかになった。

以上のことから、1歳児群の母親と1歳児群の保育者では、子どもの情動場面によって行う



** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$

図1 1歳児の子どもに対して母親と保育者が身体接触を行う情動場面についての比較

身体接触が異なることが示唆された。

IV. 総合考察

本研究では、母親と保育者が子どもに対して行う身体接触の使用の有無について母親群間および保育者群間で統計的に分析し、それぞれの特徴について考察を行った。さらに他の年齢群と異なる特徴がみられた1歳児群について1歳児群の母親と1歳児群の保育者に焦点を当てて、身体接触の使用の有無と身体接触を行う情動場面に関する統計的な分析を行った。これらの結果を踏まえ、総合的に考察していく。

母親の身体接触については、1歳児群が他の年齢群よりも「②なでる」、「④おんぶする」、「⑥肌と肌をくっつける」、「⑦手を握る」の4種類の身体接触において使用する人が有意に多かったのに対し、保育者は1歳児群が他の年齢群より「②なでる」、「⑥肌と肌をくっつける」、「⑦手を握る」の3種類の身体接触において使用する人が有意に少ないという特徴がみられた。この結果を踏まえ、1歳児群の母親と1歳児群の保育者に焦点を当てて分析を行ったところ、「②なでる」、「④おんぶする」、「⑥肌と肌をくっつける」、「⑦手を握る」の4種類の身体接触において使用する1歳児群の母親が1歳児群の保育者よりも有意に多いことが明らかになった。1歳児の子どもに対して行う身体接触が、1歳児の母親群と1歳児の保育者群とで異なる特徴がみられたことについて、野澤³⁹⁾が指摘しているように、子どもは家庭と園で異なるアタッチメントを形成するという可能性が考えられる。園で保育者に対するアタッチメントが少ない場合、家庭でのアタッチメントを求める可能性があり、本研究の結果はそれを説明できるのではないかと考える。

また、子どもは、家庭と園という「2つの社会的世界」で生きていと言われており、遠藤⁴⁰⁾は、家庭と園のコミュニケーションや連携、そして相互の信頼関係は極めて重要であると指摘している。北野⁴¹⁾も保育者の専門性と

して、園と家庭が分断されることなく「実際の子どもの育ちの姿」の情報を共有し、連携することによって、園そして家庭での子どもの育ちの連続性を図ることが大切だと指摘している。そもそも、身体接触は触れられるもの（例えば、子ども）と触れるもの（例えば、母親や保育者）が存在し、相互的に触れ合うことで成立するコミュニケーションである⁴²⁾。つまり、身体接触を行う時に母親や保育者が自ら触れることもあれば、子どもから身体接触を求める場合もあるということである。本研究において、母親と保育者が1歳児に対して行う身体接触到異なる特徴がみられたことから、子どもが家庭と園で見せる姿や求める身体接触が異なる可能性が考えられる。

以上のことから、親と保育者が共に「子どもの姿」を見つめ、互いに尊重し、学び合い、共に協力し合える関係性を築くことによって、子どもが安心して自己を発揮できる「安心の輪」が生まれるのではないかと考える。さらに、このような日々の積み重ねを通して、子どもだけではなく、子どもを取り巻く大人にとっての「安心の輪」が広がっていくのではないだろうかと推察できる。

V. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、母親と保育者の子どもに対する身体接触の使用の有無について母親群間と保育者群間で統計的な分析を行った結果、1歳児群が他の年齢群と異なる特徴をもつことが明らかになった。これは、「1歳児の子どもに対し、母親は保育者よりも身体接触（4種類）を使用する人が有意に多い」という新たな知見を得ることができたと考える。しかしながら、母親と保育者が子どもに対して行う身体接触は、対象者自身が幼少期に受けた身体接触の経験や家族構成など複雑な要因が関連している可能性がある。本研究では、対象者の経験について分析の対象としていなかったため、今後は、調査対象者のパーソナリティーや被養育経験についても

検討していくべきであろう。

また、本研究では身体接触の使用の有無と情動場面と身体接触の関係に焦点を当てており、身体接触の頻度については検討していない。さらに、身体接触の種類と情動場面の設定についても全てを扱った訳ではない。根ヶ山・河原⁴³⁾は、身体接触には多種多様な行動パターンが生み出され、寝かしつけという限定された場面においてもさまざまな身体接触がみられたことを明らかにしている。

以上の点については、本研究の限界であり、さらなる研究が必要であると考え。今後は、今回得た知見を元に、子どもに対して行う身体接触がどのような頻度で行われているのか、また、対象者自身が受けた身体接触の経験と子どもに対して行う身体接触の関連についても検討していきたい。

引用文献

- (1) Bowlby, J.: 母子関係の理論 I 愛着行動 (黒田実郎, 訳), 岩崎学術出版社, 2007, 290-297.
(Bowlby, J.: *Attachment and loss. Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books, 1969)
- (2) Harlow, H. F.: *The nature of love. American Psychologist*, 13, 1958, 673-685.
- (3) Bowlby, J.: ボウルビィ母子関係入門 (作田勉, 監訳), 星和書店, 1981, 178-192.
(Bowlby, J.: *The making and breaking of affectional bonds*. London: Tavistock, 1979)
- (4) 園田菜摘、北村琴美、遠藤利彦: 第4章 乳幼児期・児童期におけるアタッチメントの広がり連続性. 数井みゆき・遠藤利彦 (編). *アタッチメント 生涯にわたる絆*, ミネルヴァ書房, 2018, 80-113.
- (5) 松本壽通: 乳幼児期における心の健康のために, *生活体験学習研究*, 1, 89-92. (2001)
- (6) 山口創: 乳児期における母子の身体接触が将来の攻撃性に及ぼす影響, *健康心理学研究*, 16 (2), 60-67. (2003)
- (7) 同上
- (8) 山口創: 対人関係の基盤としての身体接触に関する発達の研究 (3) 思春期の接触抵抗感と心身の健康との関連, *日本心理学会発表論文集*, 70 (0). (2006)
http://doi.org/10.4992/pacjpa.70.0_3PM161 (情報取得 2018/10/6)
- (9) 藤田文: 子ども時代の身体接触と大学生の対人関係との関連, *大分県立芸術文化短期大学研究紀要*, 50, 81-93. (2013)
- (10) 山口創: 子供の「脳」は肌にある, 光文社, 2016, 82-84.
- (11) 鈴木晶夫、春木豊: 身体接触に関する試験的実験, *早稲田大学心理学年報*, 21, 93-98. (1989)
- (12) 曹美庚、釘原直樹: 発達段階における親子間の身体接触に関する研究: 日韓の幼稚園児と小・中学生の両親からの報告を中心に, *対人社会心理学研究*, 18, 103-111. (2018)
- (13) 前掲 (11)
- (14) 前掲 (12)
- (15) 鎌田桃代: 保護者の乳幼児に対する身体接触に関する調査研究, *愛知教育大学幼児教育研究*, 19, 29-37. (2017)
- (16) 前掲 (9)
- (17) 根ヶ山光一、河原紀子、福川須美、星順子: 家庭と保育園における乳幼児の行動比較—泣きを手がかりに一, *こども環境学研究*, 4 (3), 41-47. (2008)
- (18) 河原紀子、根ヶ山光一: 食事場面における1, 2歳児と養育者の対立的相互作用: 家庭と保育園の比較から, *小児保健研究* 73, 4, 584-590. (2014)
- (19) 北野幸子: 家庭との連携に関する保育者の専門性に関する検討, *保育学研究*, 55

- (3), 9-20. (2017)
- (20) 鎌田桃代：幼稚園における身体接触の意義を探る—保育者と子どもとのかかわりに着目して—, 愛知教育大学 2015 年度卒業研究概要. (2016) <http://hdl.handle.net/10424/00007222> (情報取得 2018/10/26)
- (21) 前掲 (9)
- (22) 前掲 (20)
- (23) 前掲 (7)
- (24) 根ヶ山光一：対人関係の基盤としての身体接触に関する発達的研究：(1) 乳児における身体接触遊びの日英比較, 日本心理学会大会発表論文集, 70 (0), 159. (2006)
- (25) 山口春花、白川佳子：仮想場面における母親と保育者の子どもへの関わり方：不安定な3歳未満の子どもに対して行う身体接触の特徴に着目して, 乳幼児教育学研究, 30, 27-39. (2021)
- (26) 前掲 (10)
- (27) 飯塚有紀：乳児の「抱っこ」に関する心理学的研究の展望と今後の課題, 人間文化創成科学論叢, 12, 183-190. (2010)
- (28) 水野佑紀、今村光章：3歳児と保育者の身体接触の意味, 岐阜大学カリキュラム開発研究, 38 (1), 151-160. (2022)
- (29) 西隆太郎：子どもと出会う保育学 思想と実践の融合をめざして, ミネルヴァ書房, 2018, 113-114.
- (30) 数井みゆき：第5章 保育者と教師に対するアタッチメント, 数井みゆき・遠藤利彦 (編), アタッチメント 生涯にわたる絆, ミネルヴァ書房, 2018, 114-126.
- (31) 初塚眞喜子：アタッチメント (愛着) 理論から考える保育所保育のあり方, 相愛大学人間発達学研究, 1-16. (2010)
- (32) 岩立京子：第5章 生活を通して育つ人との関わり §1 親 (保護者) との出会いと関わり, 無藤隆 (監)・岩立京子 (編), 新訂 事例で学ぶ保育内容 (領域) 人間関係, 萌文書林, 2018, 124.
- (33) 今井和子：教育技術「新幼児と教育」MOOK 0. 1. 2歳児の担任になったら読む本 育ちの理解と指導計画, 小学館, 2014, 36-41.
- (34) 根ヶ山光一：母子関係の基盤としての身体性—へだたり (遠心性) に注目して—, 発達 155 【特集】 脳・身体からみる子どもの心 I 子どもの心の育ち, ミネルヴァ書房, 2018, 16-21
- (35) 若山望：第6章 保育者と子どもの「人間関係」第1節 乳幼児の心理的安定の基盤としての保育者の関わり, 小田豊、奥野正義 (編) 新保育ライブラリ 保育の内容・方法を考える 保育内容 人間関係, 北大路書房, 2011, 88.
- (36) 古賀松香：1歳児保育の難しさとは何か, 保育学研究, 49 (3), 248-259. (2011)
- (37) 野澤祥子：保育の場におけるアタッチメント, 発達 153 【特集】 最新・アタッチメントからみる発達 養育・保育・臨床の場における“愛着”をめぐる II アタッチメントを実践に応用する, ミネルヴァ書房, 2018, 55-60.
- (38) 同上
- (39) 前掲 (37)
- (40) 遠藤利彦：赤ちゃんの発達とアタッチメント 乳児保育で大切にしたいこと, ひとなる書房, 2020, 100-101.
- (41) 前掲 (19)
- (42) 山口創：第8章 対人空間と身体接触, 春木豊、山口創 (編), 新版 身体心理学, 川島書店, 2016, 199-211.
- (43) 根ヶ山光一、河原紀子：保育園における寝かしつけ行動の日英比較 特集 睡眠の基礎と最新の知見, 乳幼児医学・心理学研究, 19 (2), 117-123. (2010)

謝辞

本研究にご協力くださいました保育園とこども園の先生方、および、保護者の皆様に深く感謝申し上げます。

付記

本研究は、筆者が共立女子大学大学院家政学研究科に提出した修士論文の一部に、加筆・修正したものである。